

〔二〇一九年度卒業論文題目〕

〔考古学〕

鈴木美咲 「古代有爾郷の土師器生産と流通」

中尾真琴 『異形局部磨製石器』における「考察」

山岸伶嘉 「大阪湾・播磨灘周辺における蛸壺の研究」

〔中世史〕

角谷明徳 「北野社における短冊支配の考察」

〔近世史〕

伊藤康貴 「江戸時代の砂糖専売制下の流通と消費」

今里香奈 「近世漁村の年貢諸役在請の特質」

―紀州藩二分口制度を中心に―

相馬幹大 「近世廻船荷物の積載法と運搬の実態」

―熊野灘の難船事例を中心に―

〔二〇一九年度修士論文題目〕

小河仁 「中世における国家的祈雨・止雨儀礼の研究」

〔編集後記〕

小誌もついに二〇号の節目を迎えることができました。小ぢんまりした身内の紀要雑誌ではあるが、三重大学附属図書館の学術機関リポジトリ（オープンアクセスシステム）を通してネット上で閲覧できるため、海外でも読まれ、国際的な学術交流に発展したこともあった。研究上の意義さえあれば、発表媒体に限らず正当に評価される時代である。学生たちの卒論・修論を含め、重要な研究成果を埋もれさせず、広く発信する場として今後も編集・発刊を続けていきたい。

この『三重大史学』の生みの親である山中章先生は、二〇一四年三月に御退職後も引き続き非常勤で本学部の教育に御尽力下さっていたが、学芸員資格科目を中心に担当頂いていた「盟友」の清水みき先生と共に、本年度をもって直接の教育活動からは引かれることとなる。両先生ともまだまだお元氣なだけに残念ではあるが、制度的なことでは致し方ない。本号で山中先生の玉稿を巻頭に掲載できたことを喜びとし、これまでの様々なご指導に感謝しつつ、益々のご活躍を祈念申し上げたい。

さて、「編集後記」のスペースが異例なほど広がってしまっただけは、卒論の提出者が例年になく少なかったためである。学年ごとにゼミ生の人数には変動があるが、気になるのは卒業研究に取り組みながら途中で「脱落」する者が増えてきたことだ。今年度も三名が提出に至らなかった。また、専門課程の途中でゼミを変え、私たちのもとから去って行く学生も目立っている。考古学・歴史学のゼミは、学部内でも有数の、「厳しい」ゼミだと言われる。だがそれは、専門性の高い学術的スキルを身に付けて社会に羽ばたいて欲しいと願い、教育しているからだ。

お金はなかったが、時間だけはたっぷりあった自分の学生時代に比し、今の学生たちは呆れるほど忙しい。学資を稼ぐためのアルバイトなどやむを得ないものもあるが、やれ公務員講座だ、やれインターンシップだと追われているのを見ると、可哀想にもなってしまう。だが、行政の首長も企業の経営者たちも、付け焼き刃の知識や小手先の技能ではなく、真の力を有する「役に立つ」人材をこそ、求めている。私の感触でも、多少の運不運はあるものの、演習などゼミ活動にきちんと取り組んだ者は希望する職に就いているし、そうでなくとも活躍の場を得ている。

昨今の文科省は、出向先と天下り先の確保を目的に大学統制を強め、大学当局はその文科省に媚びへつらい、虚構の「教育改革」を打ち出し、学生を犠牲にしようとしている。だが学生の皆さんも、それを見破り、騙されないための眼力を持たねばならない。虚実入り混じった情報過多の時代に、賢く自分の行動を処し、我が身を守る「真の力」、それは学問研究に真剣に取り組むことでこそ、習得できるものだと思う。（つ）

三重大史学 第二〇号

二〇二〇年三月一日発行

編集・発行 三重大学人文学部考古学・日本史・東洋史研究室

〒五一四一八五〇七

三重県津市栗真町屋町一五七七

TEL: 〇五九一三三二一二二一 (代表)

FAX: 〇五九一三三一一九九 (共同)

MAIL (山田雄司): yyamadada@human.nic-u.ac.jp

印刷 伊藤印刷株式会社 (津市大門三二一三)